

百人一首ゆかりの地 福知山

「あらざらむ この世のほかの 思ひ出に

いまひとたびの あふこともがな」(56)

(私はこの世のものではなくなってしまいます。あの世へ行ってからの思い出に、今一度あなたにお会いしたいのです・・・)

和泉式部は、平安時代中期の女流歌人で、大江雅致(おおえのまさむね)の娘として生まれています。

最初に橘道貞の妻となり、小式部内侍を産みましたが、のち冷泉天皇の皇子為尊親王と、またその弟である敦道親王と恋に落ちるなど、恋多き波乱に富んだ人生を送ったことで知られ、情熱的で自由奔放な恋愛歌が数多く残されています。一条天皇の中宮彰子(しようし)に仕えた後、最後は源頼光の酒吞童子退治の物語の登場する四天王の一人、藤原保昌(ふじわらやすまさ)の妻となり、寛弘8年(1011)ごろには夫の丹後国司命に伴って、丹後宮津の地に同行したといわれています。

丹後・丹波地域には和泉式部に關わる遺跡が数多く残されており、福知山市大江町の元伊勢内宮・外宮に残る歌塚や経塚も、そのひとつといわれています。

元伊勢内宮の本殿の前の道を右に20メートルほど行くと、岩長姫命社の手前に、苔むした宝篋印塔があり、これが和泉式部の歌塚といわれています。全高68センチ程で、台座には蓮葉の模様が刻まれており、様式的には室町時代後期のものとも推察できますが、同神社には歌塚としての言い伝えしか残っておらず、具体的な建立時期・建立者は不明のままです。

もう一つ、元伊勢外宮豊受大神社の参道の脇に、室町時代より和泉さんと親しまれた、和泉式部の経塚と伝えられる宝篋印塔があります。今も土地の人々に大切に管理されており、毎年3月と8月には、祭礼が行われ式部の遺徳を思んでいます。当時の大江山付近には、京都から宮津へ通じる京街道があり、丹後へ赴く和泉式部は、実際に大江山のふもとを歩いたのではないのでしょうか。

福知山にて

「丹波なる 吹風山の 紅葉は

ちらぬさきより ちるかぞ思ふ」

和泉式部

(1011年頃 宮津への道中にて)



元伊勢内宮



和泉式部歌塚



経塚



歌塚

元伊勢外宮

いづみしきぶ おおえやま もとせ うたつか
和泉式部と大江山、元伊勢の歌塚